

イギリス文学と「慈善」

— *Howards End* 試論 —

浦野 郁

1. はじめに

本研究は、申請者が2004-2008年にイギリスに留学していた際に抱いた、「なぜイギリスではチャリティ活動がこんなにも盛んなのだろうか」という素朴な問いを出発点としている。チャリティ(慈善)が身近にあふれ、しかもその一つ一つに遊び心があり、参加者自身も楽しみながら社会奉仕している様子は、申請者の心に強い印象を残した。¹そのため、2019年度にも総合文化研究所の研究助成を受け、「現代イギリスにおけるチャリティ、ボランティア精神に関する研究」を遂行している。その際には先に挙げた問いを出発点に、かつての留学先である北部の街ダラム(Durham)で行われた“Durham Cathedral in LEGO”というチャリティ・イベントを取材し、ボランティアとして関わった人々にインタビューを行った。これと並行して文献調査も行い、チャリティ活動の歴史的な変遷及び、法的根拠についても調査した。この時の成果は「現代イギリスにおけるチャリティ研究—大聖堂の街ダラムでの実践例から—」(浦野、2021)にまとめられている。

2021年度も引き続き総合文化研究所の研究助成制度を利用し、「現代イギリスにおけるチャリティ研究」を行うことを目指したが、2020年から始まった新型コロナウイルスの流行によりイギリスでの現地調査を行うことが難しくなったこと、さらに元々の専門分野が文学研究であることから、考察と関心の主な対象をイギリス小説へと移して研究を進めた。本稿では、その成果として以下の三点に関して述べていきたい。まず、イギリス小説における慈善の描き方の変遷である。筆者は20世紀初頭のイギリス小説を主な研究対象としているが、この時代の作品においては慈善活動がどこか批判的に描かれることが多いようである。それではその前の時代に関してはどうか、まだ網羅的な調査が出来ている訳ではないが、個別の作品をいくつか取り上げながら現時点での見解を述べたい。次に、20世紀に入ってから書かれた作品がチャリティをどのように描いているか、批判的であるならば、そこにはどのような社会背景があるかを考える。ここでは、筆者が現在翻訳に携わっていることから精読の機会に恵まれたE. M. Forsterの代表作*Howards End* (1910)を取り上げる。この作品は一見したところ慈善とは無関係に思えるが、実は主人公たちが会おう下層中産階級の男レナードを巡り、チャリティについての興味深い考察が見られる。この作品について論じる上で、現在非常に活発に議論されている「ケアの倫理」や「ケアの精神」と言われるものと、チャリティ精神との関係性についても分かったことをまとめていく。どちらも「困っている人を助けたい」「相手の力になりたい」という気持ちが原動力になっているという点で相通じるものがあり、両者の関係性について考察することは今後研究を進める上で必要になってくると考えたためである。

2. イギリス小説におけるチャリティの描かれ方

イギリス文学において慈善行為や博愛主義への言及は多いが、19世紀頃までは登場人物らが社会的義務を果たす場として淡々と描かれることが多いように思われる。しかしおそらく19世紀半ば頃を分岐点にして、そこに懐疑的、批判的な視点が見られ始めるようだ。以下に著名な小説作品からいくつか例を挙げてみる。

まずはJane Austenの*Emma* (1814) を取り上げる。第十章で、主人公エマが友人ハリエットを伴い、村外れに住む貧しい一家を訪問するシーンがある。この“a charitable visit to pay to a poor sick family” (*Emma* 67) は近隣への散歩の道中に行われ、エマが村の名家の娘として日頃からこうした訪問を行っていることが分かる。実際の訪問の様子は以下のように描かれる。

Emma was very compassionate; and the distresses of the poor were as sure of relief from her personal attention and kindness, her counsel and her patience, as from her purse. She understood their ways, could allow for their ignorance and their temptations, had no romantic expectations of extraordinary virtue from those for whom education had done so little; entered into their troubles with ready sympathy, and always gave her assistance with as much intelligence as good-will. (*Emma* 70)

この描写からは貧しい人々を助けることを社会的義務として捉え、彼らに対し幻想を抱くことなく、目の前にある現実的な困難に効率よく手を差し伸べるエマの姿が浮かび上がってくる。しかし、エマが訪問の直後に“I feel now as if I could think of nothing but these poor creatures all the rest of the day” (*Emma* 70) と口にしながら、エルトン牧師の姿を目にするとすぐにまた彼とハリエットの仲を取り持つ作戦に夢中になってしまう下りには、オースティンらしい皮肉も感じられる。一連のエピソードからはエマの移り気な性格がよく分かり、エマにとって慈善とはあくまで日常の一部であり、真に心を動かされたり、他者に対して深い共感を抱く契機となったりするものではないことが伺える。とはいえ、ここで作品が揶揄しているのはエマの性格の方であり、こうした訪問そのものが批判的に描かれているとまでは言えないだろう。

少し時代が下ったCharlotte Brontë, *Jane Eyre* (1847) では、主人公ジェインが慈善学校ローウッド学院での最後の二年間を教師として勤め (Volume 1, Chapter 10)、後にはモートンで、セント・ジョンが作った労働者階級の娘たちを教える学校で教える様子が描かれる (Volume 3, Chapter 4-6)。これらの設定はエマと同じ上流中産階級の出身であるジェインの中に根付く社会的義務の感覚や基本的な善性を描き出すものと言える。しかしその一方で、ジェインが入学した当時のローウッドは慈善学校を名乗りながらも衣食住環境は劣悪であり、生徒と次々と病や死に追いやる場所であった (Volume 1, Chapter 5-9)。経営者であるブロックルハースト氏は典型的な心冷たい、偽善的な慈善家として描かれている。このローウッド学院が、実際にブロンテ姉妹が通い上の姉二人が命を落としたカウアン・ブリッジにある学校をモデルとしていることはよく知られる。姉妹の父バ

トリックは「裕福な人から寄付金が寄せられていたため学費が高くなく」(ラッツ、22) 一家の経済事情に合ったこの学校を選んだのだが、これが悲惨な結果を招いてしまったのだ。

次に、自らも慈善活動に熱心だったCharles Dickensの作品に目を転じてみる。*Oliver Twist* (1837-39) が主人公オリバーの孤児院での悲惨な体験を描くことで公的な救貧政策が機能しない様子を描く一方 (Chapter 1-3)²、*A Christmas Carol* (1843) では個人の善意と寄付・贈与行為が、そうした政策の欠陥を補う可能性を描いている。しかし同じディケンズの作品でも、*Bleak House* (1851) では慈善活動にいそしむ反面、自らの家庭を顧みないジェリビー夫人の「望遠鏡的博愛 (telescopic philanthropy)」や、対象への共感に欠けビジネスライクに慈善を遂行するパーディグル夫人の姿を通じて、慈善の悪しき側面も描かれる。³さらにJoseph ConradやRudyard Kiplingの作品に目を転じると、博愛主義的な理念の下に押し進められた帝国主義のもたらす諸問題が描かれ、これらもイギリスにおける慈善・博愛の伝統を検討し直すものと言えるだろう。

20世紀に入ってからでも慈善の在り方を問う傾向は続くようである。E. M. Forsterは*Where Angels Fear to Tread* (1905) で、主人公キャロラインやソーストンの街の描写を通じ、個人の楽しみを犠牲にして義務感から慈善に取り組むことの是非を問い、Virginia Woolfの*To the Lighthouse* (1927) では、第一章で貧困層の家庭を慰問するラムジー夫人の姿が、男性登場人物タンズリーの視点からヴィクトリア朝的な「家庭の天使」として美化されることで、読者の心に問いを喚起する。

以上に概観した通り、イギリス小説における慈善の描かれ方は19世紀半ば頃から20世紀初頭にかけて次第に懐疑的な色合いを帯びるように思われる。しかし、この時期の文学作品がチャリティをどのように描いてきたかについてはまだ十分な研究がなされているとは言えず、Frank Christianson, *Philanthropy in British and American Fiction* (2007)、Frank Christianson and Leslee Thorne-Murphy eds., *Philanthropic Discourse in Anglo-American Literature, 1850-1920* (2017)、Milena Radeva-Costello, *Philanthropy and Early Twentieth-Century British Literature* (2019) 等の研究書が徐々に始めているところである。特にRadeva-Costelloの著作は20世紀への転換期で慈善の在り方は変節を迎えたという見地から、自由主義から福祉国家への転換、大英帝国の終焉、女性の社会進出など、背後にある様々な社会的要因を指摘しつつモダニズム文学とフィランソロピの関係問い直すもので、筆者にも大きな示唆を与えてくれた。その序論から少し引用してみる。

My research challenges the dominant view that modernist individualism defines itself merely in opposition to the practices of philanthropy and explores the different ways in which modernist authors appropriated or subverted the discourses of charity, of social work, of welfare, and of giving. I argue that these writers' engagement with philanthropy fuelled their modernist politics . . . While modernist writers' responses to philanthropy affirm the importance of the individual in the emerging mass society of the twentieth century, they equally testify to the continuing importance of generosity, empathy, and hospitality.

(Radeva-Costello 2-3)

20世紀初頭の文学作品はヴィクトリア朝的な慈善を単に批判し退けている訳ではなく、寛容、共感、ホスピタリティなどの重要性に引き続き高い関心を寄せていた、というこの見解を念頭に置きつつ、次節では*Howards End*という個別の作品を取り上げて読解を試みる。

3. レナードはいかにして救済されるべきか——慈善を巡る議論

*Howards End*において慈善活動への直接的な言及があるのは、第15章で主人公のシュレーゲル姉妹が参加するディナーパーティーの場面である。ロンドン的高级住宅街チェルシーで催されるこの集まりでは、食後に参加者の関心を引くトピックが取り上げられ、活発な議論が交わされる。この日のトピックは死に瀕した富豪が遺産の用途について考える、というものだった。この席上で、シュレーゲル姉妹が最近知り合ったレナード・バストの窮状を口にしたため、一座の関心は向学心はあるがそれを支える資力のない下層中産階級のために何をすべきか、という問題に向かう。ここで“the various philanthropists” (*Howards End*、以下HE 132) の役を務める出席者たちが進み出て、無料で使える図書館やテニスコートの提供、レナードを国防義勇軍に入れる、いかがわしい出自の妻と別れる費用を用立ててやる、食べ物や衣服、あるいはヴェニス行き三等往復切符を与えるなど、様々な提案がなされる。しかしそれらに共通するのは“he might be given anything and everything so long as it was not the money itself” (HE 133) というものであり、つまり本人に直接金銭を与えることはタブー視されていることが分かる。

これらの提案に真っ向から挑戦する形で、マーガレットはレナードに対して年間300ポンドというまとまった額を与えることを提案する。この案はすぐさま反対に遭うが、マーガレットは少額を多くの人々に与えるよりも、生活を根底から変えるほどの額をまとめて与える方が効果的だ、という持論を展開し、以下のように締めくくる。“... so few of us think clearly about our own private incomes, and admit that independent thoughts are in nine cases out of ten the result of independent means. Money: give Mr Bast money, and don't bother about his ideals. He'll pick up those for himself.” (HE 134)

前出のRadeva-Castelloは、ここで慈善家たちの役を演じる出席者とマーガレットの考え方にある根本的な差異を、20世紀初頭における貧困に対する見方の変化と関連付けている (Radeva-Castello 25-34)。19世紀末から20世紀初頭にかけて、Charles Boothによる*Life and Labour of the Poor in London* (1889-1897) やBenjamin Seebohm Rowntreeの*Poverty, a Study of Town Life* (1903) といった著作が現れ、都市に住む人々の約25-30%が貧困のうちに暮らしていることが明らかになった。人々がこの数字に危機感を募らせ帝国の弱体化が叫ばれる中、1909年に出された*Report of the Loyal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*は、救貧院が貧民たちを救済しその性格を矯正するのに望ましい効果をあげていないことを指摘し、貧困とは個人の人間性や責任に帰すべきものではなく、大規模な国家の介入を必要とすべきものだという見方を打ち出し

ている。ディナーパーティーの場面で、慈善家たちが「貧困は個人の責任」（であるから、そうした相手に金銭そのものを渡すことは出来ない）という見解を体現しているとすれば、マーガレットと彼女に賛同する妹のヘレンは、そうした捉え方に疑問を抱く新時代の考え方を反映していると言っただろう。

In offering to give Leonard Bast a guaranteed income so that he can develop his finer sensibilities like his love for music and literature, Margaret and Helen Schlegel are like the Liberal welfare reformers who bypassed the discussion of character and turned the torch of empire's civilizing mission to shine on the misery and squalor at home. Even though their efforts are ultimately not successful, their friendship with Leonard exposes the controlling, piecemeal, and ineffectual character of philanthropy's charitable provisions. (Radeva-Castello 31)

しかし上記に述べられる通り、姉妹によるレナード救済の試みが上手く運ぶことはなく、作品はレナードの死と、彼の息子が将来ハワーズ・エンドを継承するという未来が示されて終わる。Radeva-Costelloは作品がヴィクトリア朝的なフィランスロピの転換を示し、より良い共同体の在り方を模索しつつ、最終的にはそうした人間関係よりもイングランドの田園と伝統に希望を託し、これもまた1906-1914年に行われたリベラル・リフォームの方向性と一致していると結論付ける (Radeve-Costello 32-34)。だが次節では、レナードの救済を巡ってこの作品が他にも注目すべき価値観を提示していることを指摘してみたい。

4. *Howards End*と「ケアの精神」

小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』（2021）の刊行をきっかけに、日本の文学研究の場においても「ケア」に関する議論が盛り上がっている。小川は、育児から介護に至るまでの様々なケアは誰もが受けるものであるにも関わらず、その価値は「自律／自立する」ことを重視する社会の中で軽視される傾向にあり、このことは文学研究の場においても同様である、と述べる。本書の冒頭ではケアの価値が看過されてきた代表例として、*Jane Eyre*の読解が挙げられる。孤児として十分なケアを受けられなかったジェインは長じて家庭教師となり、ロチェスターが後見するアデルに様々なケアを提供する。また結末部ではロチェスターの息子を生き、アデルと自分の息子の世話を生計でいくジェインの「ケア人生」が示唆されるが、これまでブロンテ研究において、主人公の人生におけるこうした側面が考察されることはほとんどなかったという（小川8-9）。

このことは、*Howards End*の読解についても当てはまると思われる。作品においては様々なケアが登場し、その傾向は特にレナードの子を身ごもったヘレンを姉のマーガレットがハワーズ・エンドに匿う三十七章以降に顕著になる。結末に向かって、マーガレットは息子の逮捕に直面し精神的に追い詰められた夫ヘンリーと身重のヘレンの面倒を見ることになり、最終的にシュレーゲル姉

妹は都会の喧騒を離れたハワーズ・エンドで、ヘンリーの世話をしつつ生まれた赤ん坊を育てていく「ケア人生」に落ち着くのである。しかし*Jane Eyre*の場合と同様、作品の結末部は従来このような観点から読まれることはなく、イングランドの田園地帯に希望を託す姿勢の方が議論されてきた。

さらに、ケアの精神はレナードに対する姉妹の態度においても発揮されているようである。小川の著作は、ケアする者とケアされる者の間に序列関係が生まれ、前者が後者のことを分かったつもりになって一方的にケアを押し付ける姿勢を疑問視し、キーツが「消極的能力 (negative capability)」と呼んだ、分からないことをあえて留保し、他者の言葉に耳を傾け理解しようとする「共感力」が求められている、と主張する (小川 15-20)。このことは、コンサート会場でレナードと知り合い、相手の社会的階層がかなり下であると承知しつつ、彼と個人的で対等な関係を結ぼうとする姉妹の様子と重なる。特に第14章においてレナードが夜通し歩き通した話に耳を傾け、日常生活の外側にあるものを目にしたいと願った彼に共感する下りは、二人が小川の言うところの「感覚 (sensation)」と「想像力 (imagination)」の働きに支えられた「多孔的な自己 (porous self)」を持っていることを明確に示す場面である。

さらに、レナードに対してまとまった額を渡そうという、マーガレットの一目非常に合理的な提案も、実はケアの精神と関連付けられる。『「利他」とは何か』(2021)において、伊藤亜紗は他者のために何かをしようとする思いはしばしば他者をコントロールすることに繋がり、それが「利他」にとって最大の敵になりうると指摘している。そこに欠けているのは「他者への信頼」——自分とは違う世界を生きている相手に対し、その力を信じ、任せるという視点——であり、伊藤は「他者の潜在的な可能性に耳を傾けることである、という意味で、利他の本質は他者をケアすることなのではないか」(伊藤55)と述べている。

利他の精神が他者のコントロールに繋がる、ということはディナーパーティーの席上で提案されるレナード救済策の多くについても当てはまる。彼が憧れる文化的な暮らしを提供しようとする案の数々は、一目本人の願望を尊重しているように見えつつ、実際はレナードという「他者への信頼」——彼の持つ力を信じて金の使い道を任せるという姿勢——に欠けている。彼をジャッキーから無理やり引き離し、元妻への賠償金を肩代わりする案 (“he must be forcibly parted from his uninspiring wife, the money going to her as compensation” [HE 132-133]) や、有閑階級の人間が彼の動向に常に目を光らせ、指導する案 (“he must be assigned a Twin Star, some member of the leisured classes who would watch over him ceaselessly” [HE 133]) などは、その典型例だろう。これに対してマーガレットは、第14章でレナード自身が語る言葉に耳を傾け、その状況を理解しようとした上で、彼にまとまった額を与えて正しい使い方を学ばせることが最善であると考えている。反対する周囲の人々に対し、“Give them a chance. Give them money. Don't dole them out poetry books and railway tickets like babies” (HE 133) と主張するマーガレットは、ひとりの大人としてのレナードが持つ判断力や能力に対し信頼を示していると言えるだろう。ディナーパーティーでの両陣営の主張は、他者をコントロールする欲望をはらんだチャリティ精神と、他者への

信頼に支えられたケアの精神のせめぎ合いとしても読めることになる。⁴

5. 「ケアの精神」が直面する困難

前節ではシュレーゲル姉妹がレナードに対して示す態度に「ケアの精神」と相通じるものがあることを確認したが、このことは最終的にはレナードを救うことには繋がらない。この節では、作品がその後の成り行きを通じ、「ケアの精神」の現実的な問題点も浮き彫りにしていることを確認する。

ディナーパーティーからの帰路、姉妹は偶然ヘンリーに会い、レナードが勤めるポーフイリオン保険会社が倒産の危機に瀕していることを知る。二人は善意からこのことを本人に知らせ転職を促すが、ポーフイリオンは実際には破綻することなく、逆にレナードは失業することになってしまう。第27章では怒りに駆られたヘレンがバスト夫妻を連れてイーヴィーの結婚式に乗り込み、ここでジャッキーが以前にヘンリーと愛人関係にあったことが露見する。マーガレットはこの事実を乗り越えてヘンリーと結婚するが、この婚姻は彼女をレナードから遠ざけることになる。“Her conscience pricked her a little about the Bastis; she was not sorry to have lost sight of them. No doubt Leonard was worth helping, but being Henry’s wife she preferred to help someone else.” (HE 257) ここで端的に述べられる通り、マーガレットがレナードに対して抱く個人的関心や「ケアの精神」は、ヘンリーとジャッキーの過去の繋がり、そして自分とヘンリーの婚姻という二つの関係性の前に、優先順位が下がってしまうのである。

一方のヘレンはオニトンでの夜、レナードへの同情心とヘンリーへの敵意からレナードと一夜限りの関係を持ち、罪滅ぼしのため自分の財産の半分近い5千ポンドの小切手を彼に送ろうとする。ヘレンの念頭に先のディナーパーティーでの姉の発言があったことは、二つのシーンで同様の表現が使われていることから分かる。マーガレットが“A big windfall would not pauperize a man. It is these little driblets, distributed among too many, that do the harm” (HE 133) と口にしていたのに対し、小切手の送付について弟ティビーに話すヘレンは“Now, what is the good of driblets? To go through life having done one thing - to have raised one person from the abyss; not these puny gifts or shillings and blankets -” (HE 251) と口にしてるのだ。ディナーパーティーでの提案が思いがけない形で実行に移されるわけだが、レナードは自分がヘレンを墮落させた、という罪の意識に取り付かれており小切手を受け取ろうとしない。一度に多額を与えるという救済策が、少なくとも物語のこの時点でのレナードにとっては有効ではないことが分かる。心労が重なったために働く意欲も失ったレナードは、ジャッキーを養うために自分の親族にたかって暮らす“a professional beggar” (HE 309) に身を落としていく。マーガレットとレナードの関係同様、ここでも血の繋がらない者同士の間には芽生えた友情や配慮よりも、婚姻に基づく血縁関係や縁戚関係が優先される構図があることが分かる。ここでレナード自身も気づく通り、“Society is based on the family” (HE 309) なのである。

そして作品は、すでに触れた通りマーガレット、ヘレン、ヘンリー、そしてヘレンの息子がハワード・エンドで穏やかな暮らしを営む結末を迎える。「ケアの精神」はシュレーゲル家とウィルコッ

クス家のレベルでは実を結んでいると言えるが、レナードは最終的にその輪から排除される。互いの助けとなるのは結局血縁や婚姻で結ばれた者同士であり、作品が描くケアの行方は途中から位相がずれていく印象なのである。

この成り行きを通じ、作品は「ケアの倫理」「ケアの精神」と呼ばれるものが現実に直面しうる困難を提示しているように思える。他者の声に耳を傾けることや他者を信頼することが、理念として望ましいものであることは言うまでもない。しかし現実的に考えた際、一人一人と個人的に繋がり、共感を育むことはどこまで可能なのだろうか。特に相手が、婚姻制度をベースとする家族関係の外側にいるならば。これはフォースターの他作品にも通底する、異性愛主義を前提とする社会の中で、その枠には当てはまらない「友情」にどれほどの重きをおくことが出来るか、という問いにも通じるのかもしれない、今後さらなる検討が必要であろう。

5. 終わりに

本稿では2021年度の研究成果として、19世紀初頭から20世紀初頭の約一世紀の間に書かれたイギリス小説における慈善の描かれ方を検討し、さらに*Howards End*という作品がチャリティやケアの精神をどのように扱っているかを考察してきた。その結果、イギリス小説においては19世紀半ば頃から徐々にチャリティについて懐疑的な視点が見られるようになり、20世紀前半においてそうした視点はさらなる変節を迎えるようであることが分かった。またチャリティについて考える上で、現在注目の集まる「ケアの倫理」や「ケアの精神」に関する考察を援用することの有効性も確認できた。

とはいえ、これらの考察は網羅的と言うには程遠いもので、さらなる研究調査を必要とするものである。そのため2022-2026年度には科学研究費の助成を受け、さらに研究を進めている（研究課題名：「イギリス文学は慈善をどのように表象してきたか——19世紀半ばから20世紀初頭を中心に」）。本稿執筆を通じて明確になった問題点を今後さらに追及していきたい。

脚注

- 1) 「慈善」「博愛（主義）」および、その原語である「チャリティ（charity）」「フィランソロピ（philanthropy）」については、和洋いずれの研究書でもほぼ互換的に使用されているため、本稿でも以下特段の区別なく使用することとする。
- 2) Chapter 5-7でオリバーが葬儀屋に奉公に出る場面では、「慈善学校の生徒（a charity-boy）」であるノアが救貧院出身のオリバーを見下し、虐げる様子が描かれる。慈善を受ける側の人間の間にも序列があることが分かり興味深い。
- 3) *Bleak House*で批判の対象となっている「悪い」慈善家像については、田村（2010）を参照した。
- 4) これとはやや異なる視点からであるが、Ganteau（2017）もJacques Rancièreの“new distribution of the perceptible”の概念を参照しつつ、本作品における「ケアの倫理」に触れている。こうした考え方についても今後考察を深めたい。

参考・引用文献

欧文文献

- 1) Austen, Jane. *Emma*. Oxford World's Classics. Oxford UP, 1998.
- 2) Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Oxford World's Classics. Oxford UP, 1998.
- 3) Dickens, Charles. *A Christmas Carol and Other Christmas Books*. Oxford World's Classics. Oxford UP, 2008.
- 4) ---. *Bleak House*. Oxford World's Classics. Oxford UP, 2008.
- 5) ---. *Oliver Twist*. Penguin, 1994.
- 6) Forster, E. M. *Howards End*. Penguin, 1992.
- 7) ---. *Where Angels Fear to Tread*. Penguin, 2001.
- 8) Ganteau, Jean-Michel. "He Cared: Forster, McEwan, and the Ethics of Attentiveness." Elsa Cavalié and Laurent Mellet eds. *Only Connect: E. M. Forster's Legacies in British Fiction*. Pater Lang, 2017. 95-111.
- 9) Radeva-Costello, Milena. *Philanthropy and Early Twentieth-Century British Literature*. Routledge, 2019.
- 10) Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. Penguin, 1992.

邦文文献

- 1) 伊藤亜紗編『「利他」とは何か』集英社、2021年。
- 2) 浦野郁「現代イギリスにおけるチャリティ研究—大聖堂の街グラムでの実践例から—」『共立女子大学・共立女子短期大学 総合文化研究所紀要』第27号、2021年、113-126ページ。
- 3) 小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』講談社、2021年。
- 4) 田村真奈美「『荒涼館』における慈善」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第33号、2010年、52-63。
- 5) ラッツ、デボラ『プロンテ三姉妹の抽斗 物語を作ったものたち』松尾恭子訳、柏書房、2017年。

Charities in British Fiction: An Essay on *Howards End*

Kaoru URANO

This article looks at how charity and philanthropy are described in English novels from the early nineteenth century to the beginning of twentieth century. Taking up several novels by well-known authors, it attempts to show that charitable or philanthropic acts are depicted with increasingly skeptical eyes from the mid-nineteenth century onward. The article then focuses on E. M. Forster's *Howards End* (1910) and examines the Schlegel sisters' attitude toward their lower-middle class friend, Leonard Bast. Their idea about how to help him marks a departure from the Victorian, philanthropic view of the poor and reflects the new ideas of the Liberal welfare reformers. However, the sisters' effort to keep Leonard from falling into misery does not end in success. The issue is considered in relation to the relative strengths and weaknesses of the ethics of care and changing attitudes toward public welfare in general.